目次

法華經の精髓……本多日生
大師號宣下と思想問題……野澤悌吾
大法鼓經講義……本多日生
日蓮主義より見たる無量義經……井村日威
人間苦と日蓮の信仰……國友日斌
國民性に就いて……武田顯龍
記事報道……
法華經要文講義……本多日生

第廿七年二月號

謹賀新年

舊年中の御厚情を謝し
併而不相變の御引立を

慶典奉祝紀念袈裟發賣

諸大德各位の御賞讃を博せる
王佛冥合紋章袈裟
陸續御用命あらん事を!!

(意匠登錄出願中)

謹製誠價

○鹽瀨精好純撚金白絲交織出
五七條 天一 地一 百八拾圓 百六拾圓
五條 天一 地一 五拾八圓 四拾八圓
折五條 九圓五拾錢

○鹽瀨精好純撚金紋織出
五七條 天一 地一 百五拾五圓 百四拾圓
五條 天一 地一 五拾圓 四拾二圓
折五條 八圓五十錢

○折五條用紐房 天一 地一 二圓三十錢 一圓

○諸色同格に御座候
○五七條に限り上等桐箱付

發賣元
草木法衣店
東京市淺草區三好町二番地
電話淺草三四三四番
振替東京二四五六八番

能く見ると、秘密の幕を落して、其奥の實相を吾等の前に展開したものである、神秘の扉を開く鍵を與へて下さつたものであると思ふ、それは經文に於て見れば、『如來の一切の甚深の事、如來の一切の秘要の藏皆此經に於て宣示顯絶す』を說き、どんな深い所でも殘らず說き示したとある、さうして之れは唯だ簡單な文句があるのみでは無い、法華經の初めの所にある方便品からずつと續いて深秘の奥を顯示することになつて居る、不可說の處をどうぞ說いて下さいとの懇請に對して、其の神秘の幕を除いて說き示したものが法華經である。

日蓮聖人の御言葉に於ても矢張り二つの方面が殘つて居るので、日蓮門下の人も神秘の奥に立籠つて信仰をもつ人もあるやうであるが、それは私の見た日蓮主義としては宜しくないと斷定するのであります。日蓮聖人の御言葉にも『本地難思の境智の妙法』と云ふやうな御遺文がありますから、其方を表にする人もある。されどそれは徹底せぬ人の思想である。

諸君が西洋の哲學を御調べになる場合に、不可知論に出會するであらう、「カント」もさうであり「スペンサー」もさうである、されど青年の人はこの不可知論に引掛つてはならぬ、彼の華嚴の瀧に飛込んだ人なども確かにこの病見の結果であつたと思ふ、不可知論が決して最高等の哲學ではない、それは哲學の中途である、私の知つて居る範圍に於ては、今の人類の有する哲學は不可知論に引掛つて、華嚴の瀧に飛込むやうなものではないと考へて居る、そこには實在論者と觀念論者と分れて長く鬪ふけれども、唯だ吾々の認識とか觀念とか云ふ事だけで哲學を說くと云ふ事は面白くない。又吾々の思想を切放して客觀的に實在を獨斷的に說くと云ふことも宜しくない、吾々の觀念と外部に在る眞實の實在とを結付ける所に眞の哲學がある、即ち觀念と實在とに橋を架けて其處を渡すのが哲學の天職であると云ふ事を私共は學んだのであります。それ故に不可知論に引掛ると云ふ事は、この人類の有つて居る文化がそれを許さぬ、又結局の所が分らぬと云ふやうな事では、それは哲學の職分が全滅して、所謂實證哲學と云ふやうな名に下つて、科學の下に降伏しなければならぬ、而してそれは寧ろ哲學の落城を意味するものである、それと同じ傾向を宗教が辿つて、秘密の奥は分らぬとして盲從的に信仰さして居る宗教は、今後の文化が之を認めぬのである、淨土門の信仰を誇り禪學の不可說を誇るが如き、其所に一つの眞理はあるけれども、到底全人類の宗教として發達すべきものではない、法華經はそれとは行方が違ふ、即ち法華經はこの觀念と實在とを結付けて、その外部の實相と內部の釋迦の智見とが合して一になつた所から發動して來た所のものである、吾々はその如來の導きを受け、如來の智慧の光に照されて、この不束なる思想の中にも、その觀念に外部の實在の眞相を映さんとするから、法華經に憧憬がれて行く途が開ける。法華經は決して神秘の幕に隱れたものでなくして、神秘の扉を開く鍵を與へたものであると言はなければならぬ、この意味合を以て法華經に向つて行かなければならぬ。

更に法華經の精髓は盲從的に頭を下げて拜む事ではない、それでは法華經の根本精神に達ふと私は考へて居る。其事に關しても色々述べたい事はある

けれども、時間に限りある事故、唯だそれだけに止めて置く。

二、宗教の着眼點

第二に申上げたい事は宗教の着眼點であります、人類の有つて居る宗教は非常に廣いものであつて、三百六十幾つかある、而してそれの分派を辿つたならば一千も二千もある、て現代人の云ふやうに宗教は其人々々の思想の中に異つた色彩を有つと言へば、何億萬あるか分らぬ譯である、左樣に宗教の異つた數を數ふれば、限りもない事であるけれども、併し人類の歴史あつて以來、今日迄に現れて居る宗教の中に有力なるものは二つである、即ち基督教と佛教であります、さうして先づこの二つを宗教の標本として考へるときに、何が一番宗教の大事な問題になるかと云ふと、佛教の言葉で云へば教、行、人、理、果と言つて居る、教は教義、行は修行、人は吾人、理と云ふのは實相觀、果と云ふのは超人觀です、佛教で言へば佛陀を指すのである、この教義と修行と人身觀と宇宙觀と佛身觀と云ふ、五つものが名前が變つて現れるだけで、之れが宗教の全體である、さうしてそれが要義である、必ず一つの宗教が成立するには、教義がなければならぬ、未製品として一個人に存在して居る宗教には教義がない、それは其人だけが考へて居るのである、宗教と云ふものは其人の頭の中に潜んで居るものを言ふのでなくして、一つの整頓したる教義を有し、此事は斯うだと指し示す所に、宗教はあるのである、さうでなければそれは卵だ、卵は教義を離れて存するけれども、所謂宗教としては組織立つた所の教義を有する、教義を離れては宗教と云ふものは成立しない、今日勝手な意味で宗教を說く人が多いが、教義の成立しないものは宗教ではない、宗教の卵である、宗教としては教義を示して成立しなければならぬ、成立して而して後始めて宗教である、それ故に宗教は必ず教義を有する、教義をドクマと稱して惡口を言ふ者があるが、之れは固陋なる人達である、宗教は頭の中で考へて居るものでなくして、教を立てゝ人心を支配し人間の行爲を導くので、座禪をして右に行くべきか左に行くべきか將た眠るべきかと云ふやうなことを考へて居るのも、宗教の中に入れて居るかも知れぬが、それは未だ宗教の本質を整へたものでない、宗教の門前をまごついて居るものである、宗教は實行を伴ふものでなくてはならぬ、實行を除いては宗教ではない、道德も矢張同じ譯であつて、考へて居るだけでは道德ではない。宗教は先づ教義を有し、さうして之れに導かれた實行即ち修行、而して其本質となるべきものは何であるかと言へば、これは文字でも理窟でも學問でもない、實際の物がある、それは生ける人、其存在せる宇宙、さうして宗教的の超人者である、即ち絶對の靈格を備へて居る神や佛と言はれる所のもの、此三つのものが宗教の本質であつて、其說明の巧拙如何に依つて宗教の等差が分れて來るのである、人間の何たるかを說明しないては宗教は起らない、又宇宙の事を說かずしては宗教ではない、又手を合はして拜むべき相手がなくては宗教ではない、それは强ひて言へば拜まないても宗教だと云ふ人があるが、それは自己流の說明である。先に言ふが如く、基督教と佛教とを宗教の標本として考へる時には、拜む所なくしては宗教でないと斷言

して宜いのである。

斯樣にして此五つのもの、即ち教義、修行、人心觀、宇宙觀、佛身觀が、宗教の着眼點であることをハッキリ意識して置いて、さうして法華經に這入つて行かなければならぬ、法華經の何處が宜いのだと云ふ事をも何も考へずに、先きに言ふ解けない所が一番善い、精髄とは解けない妙法だと云ふ、斯う云ふやうな事て行くと、解ける位の所は駄目なんだ、解けない所が善いと言ふことになる、さう云ふ所て精髄を押へやうとする人があるが、さう云ふ押へ方は本物ぢやない、法華經の精髄は教義としてはどう、修行としてはどう、人身觀としてはどう、宇宙觀としてはどう、佛身觀としてはどうと、少なくともこの宗教の要義てあるべき五大綱目に對して、その精髄を押へなければならぬものてある、之は動かぬ所てある、諸君がどう云ふ學問を爲さつても、其中心點から進んて行つたならば、得る所頗る大なるものてある、佛教の一切經七千餘卷を御覽になるにしても、又は華嚴經を御覽になるにしても、華嚴經の教義はどう實行はどう、人身觀は如何、宇宙觀は如何、佛身觀は如何と云ふ風に着眼して、さうして經中に示されたる教義に導かれて修行を起し、人身宇宙超人の三大綱目を見さへすれば、他は枝葉てある、斯くしてその經の精髄を握る事が出來る、他の基督教を御調べになるのても同じ事てある。

三、法華經の教義

そこて第三に移つて法華經の精髄をこの五大綱目に依つて見たいと思ふ、併し時間が少ないからして精髄に迄行かずして入口て終るかも知れぬが、自分の考へた一端を申して、アトは諸君の推測に委せるより仕方がない。

先づ法華經の教義の成立、これには色々大切な問題がありますけれども、一番大切と思ふのは、現實から離れずして其中に最高の理想を導いたものが法華經の教てあると思ふ、單に人本主義てあるとか現實主義てあるとか云ふ風に考へますれば、それには缺點がある、人間を本としない學問や思想はいけないが、人間を本とするが爲に、人間を低いものに見て仕舞つて、飲んだり食つたりする事が全部てあるかの如くに考へ、パンの問題を離れては學問も顧みるに足らぬと云ふやうな人本主義が出て來たり、人間だもの男が女を好き、女が男を好くと云ふ事は、これは大切だと云ふやうな事ばかり言つては、人本主義やら墮落主義やら分らぬ、さう云ふことては迚も法華經に近附く事は出來ぬ、眞の人間を理解し眞の人生を理解するならば、其處から離れずして高等の理想に進むことが出來る、即ち眞の人生より離れずして其所に高等なる理想を導いたものが法華經てある。これは哲學ても宗教ても注意しなければならぬ點てあつて、實際から離れて空論空言に亘ると、高きに似て而も無用のものになる、佛教の中て言ふならば般若心經てあるとか、或は金剛般若經てあるとか、或は圓覺經てあるとか云ふ御經は、兎角高い方へ高い方へと行つて、實際の人生と緣が切れる、色即是空、空々寂々と云ひ、それより先は寢るより仕方がなくなる、それが眞理の半面てはあるけれども、さう云ふ方へばかり逃げて行つてはどうもいかぬ、先帝の御製に

白雲の餘處に求むな世の中の

誠の道そ敷島の道

と示されましたが、現實から離れた所の空漠な理想はいけない、之を代表するものは眞言である、現實から掛離れた方へ方へと行つて居る、又華嚴經奈良の大佛はどつちかと云ふと行つたり戻つたりブラ〳〵して居つて、到頭仕舞には人間から緣を切つて仕舞つた、人間から離れて仕舞へば有難くない事になる、人間と緣を切らずして高き理想に向ひ、信仰の手を合せさす所に宗教はある、其所を釋迦は說いた、阿含經の如き實際的の教化を見よ、日常現實に生活して居る者に施した教へであるが、更に華嚴經や圓覺教のやうな高遠なる理想と、兩方の善い所を調節し來り、現實の實際と高遠なる理想とを一致せしめたが法華經の教である、先づ法華經を說く場處に就て見れば、法華經は始め印度の耆闍崛山と云ふ山で說いて居る、それは地上に於ける山で今尙ほ現存して居る、釋迦は山とか公園のやうな風景の佳い所を選んで始終法を說いて居つたのであるから、日比谷公園とか上野公園とか云ふ所に於て法華經を說始めて居る、決して地上を離れて居らない、それが高い理想に上る時、十一番目の寶塔品に於て空中に昇つて法を說くと云ふ事になつて居る、さうして藥王品の前の囑累品の時に降つて、耆闍崛山の本座で法を說いて居るのである、方便品の始に「爾の時に世尊、三昧より安詳として起つて、舍利弗に告げたまふ」とあるが、舍利弗尊者と云ふのは現實の人である、其現實の人を相手にして說いて居る、其次にも矢張、迦葉、阿難、須菩提、目連と云ふやうな人が信解品の始めに、哭聲聞として擧げてある、これ等は皆現實の人である、然るに他の御經を見ると華嚴經は始からさう云ふ人間ではない、雲の上から出て來た所の解脫月菩薩や金剛憧菩薩とか云ふやうな丸でパノラマ式のものになつて居る、密嚴經でもさうであれば大日經でもさうである、架空的なる所の人物が現れて來る、登場人物が現存して居る方ではない、全くパノラマ的のものである、其場所は遠き所の假想世界であつて、何處を尋ねても見當らない所である、阿含經は總て現實に說話が起つて居るが、併し其所には深みに於て足らぬ所がある、他の大乘經は深みがあつても現實を離れて居る、さうして又足らぬ所もある、それが法華經は事實を離れずして深みをも示したのである。さうして法華經の標題がそれを現して居る、妙法蓮華經、これには色々の意味があるが、蓮華と云ふものは釋迦の教としては根本の大精神である、釋迦は實に言論に自由自在を得た人で、一切經に現はれて居る譬ば數へ切れない程である、又華嚴經邊りの菩提心を讃歎する所などでも百八種の譬が上つて居るが、實に巧妙なものである、故に一切經中には譬喩が無數にあるが、釋迦は常に我が譬喩の中で最上なるは蓮華である、其次には四つあると言ふて居る、此四つは餘り長くなるから申しませぬが、一番最上なものは蓮華であると言つて居る點に注意しなければならぬ、これには釋迦の大切なる大理想が籠つて居る、蓮華は泥の池の中に、根が在つて其所から芽が出て、泥水から伸びて、清き空中に出て、さうして綺麗な華を開き芳しき香を放つのである、泥水の如き此現實から理想の華を咲かして行かうとする所に蓮華の理想はあるのである、それを死人の華と言つて人が死ぬと蓮の華を持つて行くのは大變な間違である、蓮華は現實と理想

との調和を教えたもので、釋迦の愛したのは人生に於ける蓮華である、現實と離れず、而も其泥水に染まずして美しき花を開くのがよいので、總ての問題はこの方針で解決しなければならぬ、それが人身觀の上には悉有佛性となり現動的の佛性を見、菩薩的となり、超人觀の上には現身の釋尊の上に顯本して實在の本佛を顯はし、實相論の上には現象即實在の思想となり、其他の思想問題の上には實際と理想とを調和し、或は精神生活と物質生活とを一致せしめ總てが此一乘の教に一致すると云ふ大精神になつて居る、即ち蓮華一つを以て總てを說くことが出來る、それ故に法華經の教義、行法、人身、宇宙、超人の五大綱目の精髓は蓮華の思想を以て一貫する、即ち現實を離れずして理想を啓發する、低き立場からして之を高等に導く、人間を重んずるが故に人間の善良なる方面を尊重する、犬や猫は頭と畢丸とが併行して居る、時に依ると畢丸より頭が下る事があるけれども、人間は人間らしき行爲をする時に於ては頭が畢丸と併行する事はない、之れが獸欲を行ふ時には併行して行く、だからして人間の天分は明かに此頭が一番大事なものに違ひない、此意味を於て法華經は現れて來たのであつて、此精神に融合してさうして世間を導いて行く、だからして世間の法に染まらざるを蓮華の泥水にあるが如しと法華經に說いてある、蓮華は泥水の中でなければ生じない、高い所や陸の上には蓮の華は咲かぬ、必ず低い穢れた泥の中から伸び出て　美しき華を開く、て其所を法華經は考へて教を立てたのである、それ故に其教義は實際問題を離るゝ事が出來なくなつて來る、そうして人間の棲息して居る人生の實際と云ふものは、個人に就いて考へて見ても色々の問題がある、之れが家庭を作り、社會を造り、國家を造る、故に文化の開發を忘れたり、國家の進運を忘れたり、社會の調和を忘れたり、個人の啓發を忘れたりして、別に佛壇の前とか本堂の隅とかに教を立てるものではない、總て人間の活動して居る所の、所謂生活全部の中に流れ込んで光を與へ之を導かんとするものが法華經である、それは別に取立てゝ申さぬても後に話をする事で、段々明になるが、要するに其やうな事に法華經の教義の精髓を見て置かなければならぬ、一言にして之を言へば一乘の教である。

四、法華經の行法

それから行法の精髓はどう云ふものかと云ふに、是も他の宗派では座禪をして朝から晩迄考へて居るのを行法だと思ふが、法華經にはさうなつて居らぬ、どう云ふ事を行法として居るかと言へば則ち人生の活動全部の中に直ちに信仰の光を現はして行かなければならぬ、それ故に其事は法華經の不輕品に於てこの事を示して居るのである、「汝等の行ずる所是れ菩薩の道なり。」實に立派な教である、之を日蓮の言葉に移せば「宮仕を法華經と思召せ」と云ふ事になる、學生に對して言へば諸君等が學問修行の中に法華經は活躍して居らなければならぬ、學校を出て各々職業に就かるゝならば、各自の業務其もの、中に、日常の仕事の中に法華經の力と光とは現れて行かなければならぬ、「汝等の行ずる所是れ菩薩の道なり」でなければならぬ、日蓮が四條金吾が出家したいと云ふ時に止めて、出家ばかりが佛道修行ではない、汝は汝の今迄仕へて來た所の主人に仕へて居る、其

所に法華經があるのだから、宮仕を法華經と思召せと言つて、彼の出家を止めて居る、佛法修行と言へば、唯だ御會式に高燈を擔いて一貫三百どうても宜いと言つて練り歩いて居ること丶思ふは大間違である、人間生活や業務と、宗教の修行とが二分されては、二重生活になる、それでは信仰の効果は薄いのである。佛道修行の爲に商賣を廢めて仕舞つて、朝から晩迄讀經三昧に耽つて居つても是亦隨分因つたものである、是は消極的の破壞運動である、人間は各〳〵業務を選んでそれに盡さなければならぬ、其事は釋迦が非常に强く說いて居る、釋迦は人間の仕事を捨てゝ流浪の生活、世捨人の生活でも勸めたかと云ふと、決してさうではない、極力それに反對して居る、或老爺が自分の商賣を息子に讓つてブラ〳〵放浪生活をして、釋迦の所へ遣つて來た、あなたは脫俗と云ふ事を說くさうだが、私は最早金錢名望の慾はない、商賣は息子に讓つて氣樂なものである、何處へ行かうが構はぬ、是が所謂脫俗だと言ふて、褒めて貰ひに來た、所が釋迦は何と言つたかと言ふとそれは怪からぬ、其のようなものが一番いかぬと思ふ、何の責任をも解せず、さうして唯だブラ〳〵歩き廻つて居るのが脫俗ではない、役人なら役人が其仕事の中に正義を重んじ、所謂綱紀肅淸を遣つて行く、それが即ち脫俗である、然るに俗氣紛々であるが故に有ゆる職業の中に間違が起る、各々が責任を重んじて其職業に從事して行きさへすれば間違は起らない、それが脫俗である、脫俗と言ふのは業務を捨てて仕舞つて皆が乞食のやうにぞろ〳〵歩けと云ふのではないと、叱られた、そこに學び損ひがある、日本の今日の澤山の坊さんの中にも佛敎と云ふものは業務を捨てゝ仕舞つて、何等の責任をも感ぜずブラ〳〵して居るのだと考へた、坊さんが澤山居る、そんなものが佛道修行ではない、自分の職業に從事しながら佛道修行は出來る、是が原始佛敎から今日まで貫いて居る、大精神である、それがどうしてあんなものが出來たか分らぬが、ものゝ間違ふと云ふものは正反對の方向にまでに間違つて行くものである、日蓮聖人は非常に嚴肅な人であるが、今日の信者には一貫三百どうても宜いなどゝ云ふことが流行つて居る、是は日蓮聖人の最も嫌いな所だらうと思ふ、斯う云ふ風に正反對の事が蔓るやうなもので、流浪の生活と云ふやうな事柄も釋尊の御精神に逆行して居る事は明白である、其事が法華經の修行としては頗る明かになつて居る、傳敎大師が比叡山に佛敎を開かれた時にこれを一番大切の問題として解決された、桓武天皇に奏上した中にもありますが、日本の佛敎は小乘佛敎であつてはいかぬ、小乘佛敎と云ふのが現實から離れた意味になつて居る、私の見た小乘はさうでないけれども、奈良朝に起つた小乘諸派と云ふものは、現實と離れて居ると言上したのであります、又桓武天皇にも此佛敎の弊風を改善する思召があつたので、玆に氣投合して比叡山が開かれた、それ故に其時には日本佛敎は在家菩薩主義を標榜した、在家菩薩主義と云ふのは、今申しました各々の業務に努力しつゝ、政治家は政治に努むる中に菩薩の精神を輝かし、農工商は農工商に努力する中に菩薩の精神を輝かして行くのが、在家菩薩の佛敎である、これは非常に大事な點で、先年大內靑巒居士が在世の當時にてさう云ふ話が出て、日本の佛敎は其所が大事であつたのだが、其所

を遣り損つて居る、これは日本佛教の大失態であると言つて憤慨して居られたが、今尚ほこの在家菩薩主義の精神が能く諒解されない、諸君等が今の佛教に來るには此精神でなければならぬ、何も佛教に入るに頭髪を剃らなければならぬ事もないし、今迄の職業を廢めなければならぬ事もない、其仕事を通して其所に理想の華を輝かして行き、菩薩の精神を打込んで行く、之は釋迦が一貫して力説した所でありまして、法華經は全く在家菩薩主義の教である、教義としては現實から離れずして高き理想の華を開く事蓮華の如く、又行法としては實際の活動の中に菩薩の精神を打込んで行くのである、之を忘れてはいかぬ。

五、法華經の人身觀

それから人身觀としてはどうかと云ふと、是が矢張人間を押へて其人間の中に佛性を見やうとするのであります、「夢醒めて衣のうちを今朝見れば珠かけながら迷ひぬるかな」と云ふ慈鎮大僧正の歌がある、これは叡山の慈鎮大僧正が寢しなに數珠を尋ねた所が所在が分らぬ、そこで小僧を呼んで叱り附けて珠數を探せ珠數探せと言つた、明朝の御勤は暗い中に遣らなければならぬのに數珠が分らぬでは氣持が惡いと云ふのである、所が幾ら探しても數珠の所在が分らない、不愉快に思ふて寢られた、翌日起きて御勤に行かうとして袈裟を掛けた所が、其袈裟に數珠が引掛いて居つたのである、即ち之を人身觀に於て説明したのである、「夢醒めて」と云ふのは物質慾望にのみ打込んだ生活、淺間しき慾望にのみ精神が引附けられて居る、其泥酔の夢が醒めて、「衣のうち」

即ち自分自身の内觀を遣つて見ると立派な佛性の珠を掛けながら、畢丸の奴隷になつて居つたと云ふ事が能く分つた、そこで「珠かけながら迷ひぬるかな」此佛性を光らさなければならぬと云ふ事になるのである、これは大乘經には何處にても共通に在るやうであるけれども、其佛性の説明の進んで居る點が、法華經の特色である、持つて居る持つて居らぬと云ふやうな事は通り越しつゝ現れると云ふ問題に法華經は進んで居るのである、さうして皆現はし得ると云ふ所の實例を示した。こんなものがあるかないかと云ふ議論ではない、事實顯動の實例を示した。如何なるものでも佛性の輝が其所に現はれて來る、女にもあるかと云ふと女にもある、又惡人はと云ふと惡人も一時の變態であつて、佛性の心までは腐つて居らぬ、提婆達多のやうな惡人にも心の奥には依然として佛性がある、如何なるものでも其上面に於ては違ふが、奥に於ては即ち一味である、例へば鼻低いとか口元が變だとか言ふが魂の奥に行つたならば同じく完全圓滿な一味である、味合も上面では鹽の辛い人間だとか、或は又神經病みの煤けたやうな奴も居るが、併ながら本當の心の奥を嚙み締めて見ると云ふと、皆何とも言はれぬ味合が出て來る、人間が惡い事をして良心の奇責と云ふ事があるが、それは佛性が濁る有樣を言ふのである、日蓮聖人の如きは鳥でさへ佛性を有つて居ると説かれた、彼の鷄が雛に餌を食はして遣る有樣は佛性の閃を示すものである、況しても人間に於て佛性を持たぬものはないと言つて居るが、其佛性を啓發する事が大切である、孟子が仁禽獸に及んで曷ぞ人に及ばざる、百鈞を擧ぐることが出來て一羽の輕きを擧げる事が出來ぬ

害はない、それは能はざるにあらず爲さざるなりと云ひ、王は寡人色を好むと言ふたけれども、それは助兵衛な所もありませうけれども、併し立派な仁心を失ふて居らるゝのではないと答へた、表面は種々分れても、人間には必ず佛性の閃と云ふものがあると云ふ事を說くのが、即ち法華經である、て劣等なる欲望の行くが儘に任かしたならば、必ず其人の幸福も失ひ、社會に害毒を流し、一家の名譽をも失ひ實に取拾すべからざるに至るから、自制して行くと云ふ事は總ての幸福を保存する上に於て大切である其佛性の閃を開いて行けば其所に佛と吾々との關係が鮮かになつて來る、人生には隨分不思議な事もある、水死した人間が何處の者か分らぬても、其身內の者が行くと鼻から血が出るとか云ふやうに色々不思議な話がある、又生んだ子供が慶應の學生のものか明治大學生のものが分らぬと云ふ時には、それは血と云ふものゝ關係に依つてすぐに示す方法がある さうである、面倒な科學的な方法ではなくて、之は確の子だと云ふ認識を與へる途があると云ふ事を聽いたが、天性相引くと云ふから親子の關係と云ふものは實に不思議なもので、本人は忘れて仕舞つて居つても其所に一種特別に相親しむ所がある、故に吾人は本當の精神は佛陀と手を握つて佛界に籍を移さんとするものであると云ふ所の關係を說いたものが法華經である、さうして其所に非常な尊い人身觀が存して居るのである。

六、法華經の宇宙觀

それから宇宙の實相に就きましては御承知の通りに諸法實相を說き世間相常住と說いた、現象即實在である、其現象も哲學の六がしいものでなくして、世間相の上に實相を見やうとして居るのである、親子となり夫婦となつたのも之は假りではない、中々根深い因緣があつて親子となり夫婦となつて來たものである、其時の氣分と云つても、氣分と永劫とは相離れないものである、さうして一時の現はれにまてに非常に深い意味を敎えて居る、其中に宇宙の大眞理が閃いて居るので、夢か幻かと云ふものはない、世間の相は常住である、眞の世界が吾々の地上から離れてあるのではない、人生に尊い眞實が存して居る、之は丁度彼の石炭からして色々の染料などが取れる、化學の研究が進んだことに依つて、東京瓦斯會社のコールターから染料を取つて紫や赤や其他色々の色で金巾やモスリンを染めて居る、又非常に臭氣のあるナフタリンのやうな眞白なものも取れる、彼の眞黑な石炭を燒いて蒸すとそれがコールターと云ふ油のやうなものになり、さうして其中から眞白なものや赤や紫や種々の染料が出て來る、實に微妙なる所のものである、表面は土のやうに黑いものと見たものゝ中から朝顏の種子を蒔けば種々の色の朝顏の花も赤や紫の色の花も出て來る、それが故に此宇宙の現れの底には微妙な意味が含まれて居り、それが殊に人生の事實として現れて來る時に社會となり國家となり大日本帝國となり、玆に一大帝國が建設されて居ると云ふ事は、非常に大きな事實である、人間一人が此所に生れて來たと云ふのも、之は偶然なものではない、日蓮の如きは日蓮が此土に生れたのは日本の國の柱として生れて來たのであると云ふ程大きく自己の存在を考へた、その日本の存在は世界に光を與へんが爲に現れしものである、それ

が人類の眞實の希望であり、釋迦は即ち佛國土を地上に實現するものであると考へた、それが即ち法華經の宇宙觀の精髓である、佛は實際の事實に就いて總ての現れの中に微妙の哲學を見て行き、人間の實際の中に哲學を發見せんとしたものである。

七、法華經の佛身觀

今一つ佛樣の事に就いて考へて見れば、是も他の御經では大日如來や阿彌陀如來が出て來て何が何やら分らぬやうになり、佛敎は始末の惡い多神敎となつて仕舞つて居るが、之れは決して佛敎の精神ではない、小乘敎の意味より見れば三世の中心に釋尊を認めたので、過去に七佛の出現があり、未來に彌勒の出現がある、過去の佛は涅槃して今は無し、未來の彌勒の現はれるのは中〻長い、氣の長い者でも待兼ねる程遠く長い五十六億七千萬年の後だ、而して現在の佛陀は釋迦である、故に釋尊に依つて敎はれなければならぬ、此次と云ふのでは五十六億七千萬年遙かなり、斯くて三世の中心統一を釋迦に見て居る、是が佛敎の大事な點である、それが他の大乘佛敎になつて來ては、或は東に藥師如來、西に阿彌陀如來とか云ふやうに、彼方此方へ氣が散つて仕舞つて釋迦中心の思想が亂れて居る、法華經は釋迦中心に見て諸佛を統一したのである、さうして壽量品に至つて現實の釋迦を顯本して、本佛の意義を明かにし、これに絕對無限を認め時間空間を捲ふて無限の活動を爲す、その本佛は今の釋迦が包含して居る、今夜此處を照して居る月、これが三千年前印度を照した月である、又遠くナイヤガラの瀧を照す月も此屋根を照すこの月であり、今の月と過去の月と未來の月とは皆同じであると云つて、中心を今と此處とに立てたのであります、即ち玆に中心思想が明かになつて居る、近來中心中心と云ふ事を言ふが、法華經ほど鮮かに中心思想を敎えたものはない、壽量品の如き眞の佛陀を說明する場合に於て、其處には統一中心の思想が現れて居る、この本佛が人生に對して實際の慈悲を示されて居る、日々の吾々の精神に光を與へ吾等の悶えて居る異なれる苦みは、皆我れ釋迦一人の苦みなりと言ひ、吾れ一人して之を救はんと云ふ大慈悲である、さうして其慈悲は汝等の心の中にある、汝等の心の中の慈悲心の發動する時、其慈悲の精神の其處に、我れ本佛釋迦は出現して其處で汝と握手しやう、汝の心に慈悲の精神を發動せしむれば、佛陀は直に其慈悲心中に出現して握手しやうぞと言ふ事を約束されたのである。

八、結論

そこで更に申上げて置きたい事は法華經と云ふものは唯だ八卷ではないのである、法華經と云ふものがあつて、其を總括して居るものは法華經八卷であるさうして法華に附屬したる所の法華經が澤山あるそれは皆法華經と同一精神であつて、實は涅槃經迄法華部に入れて宜しい、更に又一切經も皆法華部に入れて宜いかも知れないが、まあ小さく見ても涅槃經位迄は法華經の繼がりである、其隊長が法華經八卷である、又法華部の中に大薩遮經と云ふ御經がある、是が大事なお經でありまして、今日の實際問題を解釋して行くには欠くべからざる經典である、其大薩遮と云ふは尼乾子であつて婆羅門の生活をしてゐつたが、それが法華經の話をしたのである、

妻は婆羅門であつても法華經は構はない、形は縱令婆羅門であつても既に法華經の教に敬服して居つて堂々と法華經を發揚して居る、法華經は形や何かに拘らず精神的になつて居る、この大薩遮經に於ては嚴燥と云ふ理想的文化を建設せんとする國王と婆羅門の坊さんとの問答であつて、國家と云ふものは如何なる風に治むべきものか、政治は君主主義がよいか、デモクラシーがよいか、戰爭と宗教との關係は如何、刑罰と宗教との關係は如何、道德と宗教との關係は如何と云ふやうに、吾々の大切なる文化構成の大問題を論究し、人類の此文化現象と法華經との關係に就て快刀亂麻を斷つが如くに說明し、嚴燥王が敬服をした有樣が說いてある、我が國で法華經を宣傳した日蓮聖人の事蹟を御覽になれば能く分るが、日蓮聖人は立正安國を說き或は人間の生活の中に法華經を實現せんとして努力されたのである、之は諸君等が豫ねて御研究になつて居る通り彼の日蓮聖人が發揚した事實が法華經の精髓で其深い深い敎理を實際問題に移して來て、所謂世の中に法華經の光を活躍せしめた點に、法華經の精髓が存するのであります。

大師號宣下と思想問題（上）

陸軍少將　野澤悌吾

私は先般來病氣で引籠つて居りまして、本日の奉祝會に參列が出來るかどうかといふ事を危んで居りましたが、幸にして此の盛大なる會合に列するの光榮を得ましたのみならず、皆樣に對しまして私の所感の一端を述べまする機會を與へられましたことは非常に欣幸とする所であります、唯今申したやうな都合で、多分出席出來ないであらうと考へた爲に、演題は發起者の選定に委して置きましたところが、私が平素全國に亘つて思想問題を日蓮主義の見地より論じて居るといふ事から、茲に掲げられた如き演題を與へられたのであります、この演題に私の申します事が果して副ふや否や、兎に角二三の點に亘りまして御話をして見たいと考へます。

今回の大師號宣下といふことは、參列の各位と共に滿腔の悅びを以つて奉讚する次第でありまするが世の中にはいろ〳〵の考の人がありまして、或は之に對する所の俗論——大師號宣下を意義無しとするところの俗論が往々にして耳に入るのである、それが唯俗人の口から出るといふ事であるならば、强いて顧みるに足らぬのでありますけれども、專門家の中より——而も世の中に知られたる所の專門家の口からして大師號宣下を意義しとする所の議論を聽くに至りましては、私共默して已むことが出來ぬのである。大師號宣下を意義無しとするところの議論には幾通りもありまするけれども、今之れを一々擧げて辯駁をする必要を認めませぬ。私共は此の大師號

宣下が非常な深き因緣の下に行はれ、そこに尊いところの意味があるといふことを意識致しまして、それに依つて吾々信徒みづから策勵をし、又之れに依つて此主義の宣傳といふ事の上に大なる活動の力を得よう、これが吾々日蓮主義者の執るべき態度ではなからうかと考へるのである。

吾々は自己の信念の上からして、今回の大師號宣下には深き意義のあるといふ事を信ずる者である、大體に於いて先づ其の時機であります。日蓮聖人一生の御活動は「立正安國」の四字に外ならぬといふことは、既に午前の祝詞の中にもだん〳〵述べられて居りますが、日蓮聖人が何故に立正安國を唱へられたか、其當時の世相――世の中の有樣といふものは、內に於ては思想の溷濁、民心の歸嚮する所が定まつて居らなかつた、外は强大なる蒙古が將に日本の生命を奪はうとして壓迫しつゝある、此際に方つて眞に日本を救ひ、延いては世界を拯ふところの力は、法華經に依るより外ないといふ御確信の下に、立正安國の活動を發されたのである。今日の時勢は恰も日蓮大聖人の當時の如く、いろ〳〵なる思想が押寄せて參りまして、民心の動搖は今正に其極度に達して居ります、而も之を救濟するところの力は內に於て認めることが出來ない、國外の狀況を見ますると、世界の關係といふものは非常に複雜になつて參りまして、日本帝國の運命は頗る憂慮すべき將來を認めるのである、斯る時機に於いて皇室が特に立正大師の謚號を御宣下になりました事は、私共信仰の見地から見まして、非常に大きな意義のある事と信ずるのであります。

第二に此の「立正」の二字を選擇せられた事柄である。日蓮大聖人の御遺文を拜讀しますると、「立正」の二字を冠したるものは『立正安國論』と『立正觀鈔』の二つがあることは今更申す迄もありませぬ。立正安國論は正しき教を立てゝ國家を磐石の泰きに置かうとする所の御主張である、其御主張の中には之を擴張して參りますると、終に一代の御活動、我れ日本の柱とならんといふ御誓願も含まれて來ることである。又各宗の邪義を打破るところの四箇の格言といふものも此中からして湧いて出ることである、一閻浮提に未曾有の御本尊を建立なさらうとする所の其御抱負も、此中から湧いて出る次第であります。要するに立正安國といふ四字は、日蓮大聖人一代の御生命であつた。宗教の方面に於きましては立正觀鈔があります、これは其當時の宗教が、法華經に依つて居るところの彼の天台宗であつてすら、此教を遺されたるところの釋迦牟尼を忘れて、而して個人を中心にしたる所の觀心、所謂觀念觀法の上に立つて佛陀の教の心髓に達しようとした、其迷妄を打破せられたものが即ち立正觀鈔である。佛法の方面に於いては立正觀鈔、世法の方面に於いては立正安國論、此兩者を以つて日蓮聖人一代の一切を網羅することが出來ようと考へるのである。此重大なる「立正」の二字を提げて、而して之れを大師號として御宣下になりましたことは、洵に深い意義のある事でありまして、吾々信徒の殊に歡喜に堪へぬ次第であります。

斯る重大なる意義を認めて、そこに此精神に副ふべく努めてこそ、初めて一天四海皆歸妙法の二陣三陣に續くところの吾々信徒の本領といふものが、そこに發揮せらるゝ事と信じまするに拘らず、彼れ此れこれに就いて俗論を述べ、其意義を小さくしてしまい、而も不祥の言を並ぶるといふことは、吾々の甚だ採らぬ所であるのみならず寧ろ堂々とそれ等の人々に對して覺醒を促して行きたいと考へるのである。

さて此日蓮主義が思想問題に如何なる方面に於いて觸れて居るか、これは現代の思想を救濟する所の力と致しまして、各種の力面から觀察をすべき餘地

が多いのでありまするけれども、本日は其大體の觀察に止めて置きたいと考へます。

たしか本日捧讀をせられたところの本多猊下の奉戴文の御文章の中にも、現代の思想が欲求し要求する所のものは、我が日蓮聖人の主張と纔に竹膜を隔てゝ居るといふ事があつたやうに記憶して居る、私も其點に於いては同樣なる觀察をして居る者でありまするが、先づ第一に、現代の思想が何故にあゝいふ非常な底力のある所の聲を以つて湧き立つて來たであらうか、何故に世界の人心をこと〳〵く風靡しつゝ潮の逆卷くが如くあらゆる涯に押寄せて來るであらうか、たゞ學者が考へてそれを唱へたからしてこれが宣傳せられたといふものではない、人心の强烈なる要求、時代の必然の勢として湧いて來て居るものであるといふことを觀察しなければなるまいと思ふ。此點が了解が出來なかつたならば、吾々日蓮主義者が大聖人の敎を奉じて思想を善導するといふやうな事は、寧ろ烏滸の沙汰となつてしまふのである。

今日の新しい思想といふものゝ湧いて出た原因は決して手短かなものではない、西洋の永い間の歷史を辿つて進展した所の文明、その文明が終に行詰つた結果、十九世紀に於いて殊に個人主義といふものが發展をし、さうして遂に此俗惡なる文明を產み出し、現在の如く醜惡なる社會を形造つたといふ、此現狀に對しまして、當然起るべき人類の要求であると私は認めるのである。釋迦如來は阿含經を說かれる際に於いて、從來西洋文明が主張した如き、人間の知識を根抵としてそこに築き上げる處の文明は必ずや行詰るであらう、人類の幸福を奪ひ去るであらうといふ事を豫言せられてあるに拘らず、西洋の文明は終に釋迦如來の戒めたる方向に向つて滔々として流れ來つたる結果、遂に今日の如き世の相を現出したのでありまするが、斯かる狀態になつた時に於いて、人類自然の聲として改造が叫ばれて來て居る、日蓮大聖人が六百五十年の昔に於いて絕叫せられたる當時の思想と同一なる狀態に在ることを吾々は認めるのである。日蓮聖人は其當時の狀況に對して、七難の競ひ起るといふ事を肯定して居られるのである、七難の競ひ起る事を慶賀して居る譯ではないけれども、斯る有樣に於いては七難が競ひ起らざるを得ないといふ所の、その眞理を認めて居られるのであります。今日の改造の叫といふものも、さういふ意味合に於いて當然起るべき因緣を有つて居ると吾々は見て居るのである。

此人類の血の涙を以つて要求しつゝある所の改造の聲を目して、徒にこれは危險であるとし壓迫をしさうして武力を以つて之を壓倒しようとする所の政策といふものは、寧ろその希望を激成してさうして破壞を遠かならしむるものであつて、決して之を善導する所の道ではないのであります。古來の革命の歷史を繙いて見ましても常に左樣にして事を畧つて居る、人類の必然の叫、此叫に對して起つて來る所の議論、之を或は警察の手を以つて壓迫し、或は御用勞働黨の手を以つて壓迫し、壓迫に壓迫を加へたる結果といふものは、終に革命となつて現はれて居る事は、今までの歷史を通じて歷然として其證據が明かである。吾々日蓮主義者は此現代に於ける所の人類の叫に對して、最も深き同情を以つて之を觀なければならぬ。其謬つて居る方向を誤謬として匡すのは宜しいけれども、併ながら新しい思想といふものは一切之を口にすべからず、一切さういふ考を有つてはならぬとして、之を壓迫しようとしたならば、それは日蓮聖人が四箇の格言を唱へたところの精神と全く相反して居ります。日蓮聖人は折伏のために折伏をせられたのではなくして、『鳥と蟲とは鳴けども涙おちず日蓮は泣かねども涙ひまなし』といひ、『一切衆生の異の苦を受くるは日蓮一人の苦な

り」といふ偉大なる慈悲の精神、その慈悲の眼を以つて、世の中の人々の謬つて居る其思想の方向、文明の墮落といふものを見て、さうして其根抵の深き同情を持ち之を救はんとして叫ばれた所の聲が立正安國であり四箇の格言である。現在世界の人類一切の血を沸かしつゝ進んで來る所の此現代の思想に對して、私共が若し何等の同情も有たないといふならば、これは祖師の精神に反したものと謂はなければならぬのであります。これが現代の思想問題に對して私の力説せんとする所の一つである。今日まで各所に行はるゝ所の日蓮主義の講演を見渡しまするとと、新しい思想の根抵の謬り其思想の行き方、之を實現する所の方法が正しくないといふ方面を論ぜんが爲めに、往々にして彼等の根抵の要求、之に對する同情までも失つて行かうとする傾向があるといふことは、吾々の非常に反省すべき點であらうと考へるのであります。凡そ世の中が淨化せられるといふことは、宇宙の溫かき精神に依つてのみ淨化せられるのである。あの日蓮聖人の光顯せられた所の御本尊を拜しましても、如來の大慈悲たる所の南無妙法蓮華經の光明が十方世界に亙つて居る所に、そこに十界の衆生が悉く本有の行相を現はして、さうして玆に淨化せられた所の相が、あのお曼荼羅に於いて拜することが出來ませう。如來の慈悲にあらざれば此世界は淨化せられることは出來ない、吾々の家庭でも、各人の愛の精神に依らざれば、家庭といふものは滿足に育つものではない。此愛の精神を除いて而して現代の思想を導いて行かうといふことは、根抵に於ける所の謬りであるといふことを吾々は考へなければならぬ。

次に現代思想に就いて私共が考へて行くべき點は此新しい思想がこと〳〵く人間の力といふものを强く見まして、吾々が從來いろ〳〵の世間で定められた所の道德、或は世間で定められた所の習慣、風習といふものに縛られ、さうして目を瞑つてその中を歩いて居りさへすれば宜いといふ時代は既に去つた自から根本から覺醒をして本當の自己のめざめからして此人生を渡つて見たい。此希望は三四百年前より歐羅巴に於いて强く起つて來たところの人心の傾向でありますが、大戰亂を經過して以來、人類の此希望は一層その熱度を高め、その高度を增して居ります。自分自身の力を以つて生きて行きたい、人格の根本の力を以つて此文明を進展して行きたいといふことを考へて行く、此傾向といふものを若し一切否定して行きましたならば、それは歐羅巴の中世紀の如き極めて薄弱なる暗黑の時代に陷つてしまはなければならぬのである、日蓮聖人が淨土敎の謬りを正して、而して人類の力の非常に偉大なることを發揮せられた、自分みづからが模範となつて進まれたといふのも、人間の根本の覺醒からして進むときに於いて初めて、此世の中が淨化せられ、娑婆即寂光の理想を實現し得るものであるといふことを叫ばれたものである、斯樣に私共は深く信じて居るのであります。

西洋の中世紀に於きましては、恰度佛敎の或る一派が唱へる如く、人間の力といふものは薄弱なるものであると斯う歐羅巴人は考へた、そこに發達して來た所の宗敎はどうであつたかと申しますと、純他力の宗敎が起つて居ります、人間は罪惡のかたまりである、神に依らざれば救はれることは出來ない、吾々が如何にいろ〳〵考へて文明を向上進歩させようと思つても、人間の力では殆ど出來ない事であるとして、さうして人間の力といふものを非常に小さく見、其力を否定して進んで行つたときに、あの中世紀の長い暗黑時代といふものが生じたのである。若し現在に於きまして人々が目覺めようとする叫び我は目覺めたりと考へて進んで來るところの、其人心の傾向を否定して、汝等は目覺めてはならぬと言

つたならば、それは日蓮聖人の教の趣旨とは全く反對の方向を教へるものであらうと思ふのである。寧ろ其の覺醒をさす〳〵深からしめ、而して眞の覺醒に到達せしめ、已むに已まれざる所の精神から、吾々が如來の子として、如來の使として、法のために此生活を營むといふ意味合に到達した時に於いて、初めて吾々自身も救はれ、家庭も救はれ、社會も救はれ、世界も之に依つて救はれなければならぬのである。

現代のこの我は目覺めたりと考へて居る所に、まだ目覺めない所がありますけれども、併ながら目覺めて進まうとする所の其意氣込は實に强烈なるものであります、之をまた元の眠りに復すといふ事は、到底不可能なことである。不可能の事であるのみならず、唯今申す如く日蓮聖人の教は、人々をして目覺めしめて行かうといふのが本來の趣旨である、人間の力を否定して、我は凡夫なりといふ、今日の或る一派の宗教家が言ふ如き凡夫主義を誇張して、さうして無道德論に進み、肉を肯定するばかりでない肉を是認すを所の何々主義といふやうなものを翳して、吾々を牽ねようとして居られるのではない。吾々が本佛の御子として、眞に本佛と抱き合つて進むときに、そこに已むに已まれざるところの血潮が湧いて、その血潮の迸る所、それが社會に對する所の奉仕となつて現はれることを日蓮主義は豫期して居るのである。

日蓮聖人のみではない、今日の宗教はいろ〳〵の方面から釋迦牟尼の精神を述べて居りますけれども、釋迦如來自身がすでに其根本の覺醒といふことを吾々に促して居られるのである。釋迦如來は正覺を開いて何と呼ばれたか、『我は一切智者なり、我は一切勝者なり』と言つて居られるではないか、釋迦如來は自己の人格を標榜して、我は天地宇宙の一切の眞理を曉達した所の智者であるぞ、我は社會の罪惡、人類の中に流るゝ所の一切の罪惡、この大宇宙を汚すところの一切の惡德を打破つて、そこに勝利の凱旋をしたところの勝者であるぞよ、我は一切勝者なり、我は一切智者なりといふ高い標榜を立てゝさて此人格に信頼せよ、此我が內面の覺から說き起す所の教を尊重せよとして吾々の前に立つた者である。釋迦如來と同じき覺醒に立たしめんとして教を說かれたのが、佛教の出發點であります。今日各宗各派が分裂を致しまして、吾々は到底目覺めることの出來るものではない、淨土に至つて初めて吾々は本當の修行が出來るといふやうな事を申すのは、それは佛教の方で言ふならば傍系であつて、決して佛教の正系ではないのである。日蓮主義者にして若し現代の思想に對してお前方は目覺めよう〳〵と言つて居るけれども、それは間違つた事である、目覺めんでも宜しいから唯だ南無妙法蓮華經と唱へよと叫んだならば、これはどうでありませうか。それは私は、凡夫は無力なり、道德も、菩薩行といふやうな事も吾々の力では出來るものでないとするところの、佛教傍系の一派が唱へる事と同じ歸嚮を示すものであろうと思ふ。私共の少くとも人間が覺醒して進まうといふ此氣分といふものは、到底これは防止することの出來ないものであるといふ事を認め、而して更に深き眠を覺まして深い所の覺醒を促すべく指導を與へるといふ事に於いて、初めて日蓮主義の光輝を放つてあらうと信ずるのであります。（未完）

（第三十八頁よりつゞく）

その解釋より匡正して掛らなければ活力ある佛教徒は出て來ない。だから佛教改革の根本問題は、佛教の解釋に横はつて居る、氣力を拔くやうな思想を改善して掛らなければならぬ。その意味に於てこのお經は、頗る重大なる關係を有つと思ふのである。

大法鼓經講義

本多日生

この大法鼓經は二卷のお經でありますが、その内容は頗る愉快で、殊に法華部に屬する經典であつて、種々重要なる教義が示されて居るのであります。その中に於て、特に重要なる教義を二三申して見たいと思ひます。

第一に佛教が消極的であると思ふに就ては、佛教の結論を空無我の思想に置く、又佛教は宇宙を空と見て居るのである、自己は無我である、又無我の思想は、神佛と云ふ觀念に於ては無神論である、斯う云ふ風な考からして、佛教は實生活の中に害あつて益なきものであると云ふ非難があるのであります。所が、局外の非難は兎も角も、佛教徒の中に於ても、空無我が佛教の結論であると考へて居る者が少なからず存して居るのである。若し果して佛教の結論が、空無我の思想であるとしたならば、佛教は世道人心の上に益あるや否やと云ふ事は、一個の問題であらうと思ふ。私は、徹底せる佛教がさう云ふ思想であるならば、寧ろ世道人心に益はないと思ふ。又宗教の意義から考へても、それが結論であるならば、純乎たる信念を維持することは出來ない、隨つて宗教の効能もなくなつてしまふ譯である。併ながら、空無我の主張は佛教の中に說いてあつても、それは方便の說である。方便の說と云ふのは、世俗が餘りに劣等なる慾望に耽溺するからして、その病見を匡正する爲に、その執著なりその墮落なりを教化する方法として空無我と云ふ事をお說きになるので、先づ小乘教の本領と云つて宜いのである。大乘の中にもさう云ふ風に說かれた所があつても、それは矢張り俗見に對する方便說であつて、決して佛教の結論ではない。佛教の結論は實在常住であり、隨つて有我であり、又佛身の常住を見なければならぬのである。大體宗教は、實在の觀念を基礎とすると云ふ事は、是は定論である。無我が結論であると、實在と云ふ意識が明瞭に立たぬ、全く人格の實在を否定する言葉になるから、それでは宗教としての價値も、宗教が倫理を奬勵する力も、實生活を導く力も皆無くなりてしまふ。故に空無我は佛教の方便の說である。佛教の結論は實在であり、有神であつて、宗教の信念を維持する教義が完備して居るのである。然るに誤解者があつて、左樣な思想を結論と見たのであると云ふ事を、明瞭に證明するは、佛教を興立する根本の方針であると思ふ。現在佛教徒がフラ付いて居るのも、さう云ふ思想が信仰を毒して居ると思ふ。それは、思想以外に人格の墮落と云ふこともあるけれども、佛教徒の力が現れて來ないのに、信仰を目して、却て幼稚な者のやることと思ひ、十分に研究して見れば無我であると云ひ、人生是非を俱に非なりとし、人生を夢幻の境界として居る、さう考へる所が結論と思ふ故に、達者人物と稱せらるゝ者は、無氣力の如く、無念無想とか、我れ關せずと云ふやうなことになるのである。大きな寺の和尙は、出來て居なくても、さう云ふ顏をして

居れば達人であると云ふやうに思ふと云ふ、大誤解が伴うた事が、佛教をして今日の如く萎微振はざらしめた、最大の原因であると云ひ得る。所がこの大法鼓經を見ると、頗る明白に虚無の思想を否定して「大乘經に多く空の義を説くも、一切の空經は有餘の説なり」と説かれて居るのである。小乘ばかりでなく、大乘にも空と云ふことはあるが、それは有餘の説である。この「有餘」とは餘り有りと云ふので、議論が究極して居らないので、説明の餘地を存し、結論でないのが有餘の説である。その有餘の説であることを玆に明示せられて居るし、尙この經文には頗る痛快な譬が擧げられて居る。有我と云ふことを聞いて「それは大變だ、佛教は無我だと思つたに有我と云ふのは偉いことを聞いた」と云つて驚く馬鹿者がある、それは恰度斯樣なものだと云つて、野原を旅行する者がビク〳〵ものて通つて居つたものだから、梟が樹の上で鳴いて居るのを聽いて、泥棒の囁きだと思つて驚いて、道を變へて遁げて、終に道に迷ふて大澤の中に落ちて出づることが出來なかつたと云ふ頗る愉快な譬喩が擧げてある。故に空無我を主張した馬鹿坊主、それから、それが佛教だと思つて信じて居る坊主、此等の二つは倶に顏色のないものであることが分るのである。隨つて佛教が宗教の信仰を打立つる基礎、又、世道人心を裨益する教義が、そこに頗る明白になつて來る次第である。故に佛教徒としては、必らずこの大法鼓經を讀まなければならぬ。さうしてこの經は前きにも言ふ通り法華部の經典で、維摩經や楞伽經のやうな低いお經ではない。世俗には、維摩經を見るとか圓覺經を見ることを誇とするけれども、先づ以て大法鼓經を讀まなければならぬので、其等の相場も大變違つて來るのである。「君、大法鼓經を讀んだか」「讀まない」「讀まない位なら佛教の話をするな」と云ふ位に、それが佛教學のコンモンセンスとならなければならぬ。

第二には如來に對する思想である。多くの人は、佛教を佛性論の上に止めて、所謂內在的實在論に止めて、客觀的實在の如來を明かにしないと云ふことは、是亦佛教學者の通弊である。即ち、佛教が汎神論であると云ふやうなことを言つて引つ掛つて居るのも、矢張り佛性論に結論を置くからである。佛教の汎神的思想は基礎的教義である、結論としては大人格の存在、而して諸佛と本佛との關係を解決して統一佛に達して居るのである。それは一宗一派の議論でなく、佛教全體の結論である。如何なる宗旨と雖も、法華經の思想を除外して佛教を論ずることは出來ない。阿彌陀經、大日經は讀まなくても宜いが、法華經を除外して佛教を論ずることは出來ない。是は啻に天台宗、日蓮宗のみてはない。現在大藏經を繙いて研究して見て、法華經を除外したやうな思想は佛教を批判することは出來得ないのである。法華宗だから法華經を讃める淨土宗だから阿彌陀經と云ふものてはない。大體佛教を達觀したならば、法華經のやうな偉大なる經典を除外することは、何宗と雖も出來ないことてある。隨つて佛性論に結論を置くことは、是は間違てある。尙宗教學の上から考察しても、佛性論を結論としたのては、客觀に於ける本尊が成立たぬてはないか、本尊なくして宗教があるべきものてはない。故に宗教的の思想から云へば、縱しや佛性論をやるにしても、それが現れる方

法としては、客觀的の佛陀を意識しなければならぬ。それが佛教に於ては、親子の關係に依つて說かれて居るのである。父なくしては子はない、所謂佛子と云ふ自覺、汝等は是れ眞の佛子或は廣い意味に於て、悉く是れ我が子なりと云ふことに就ては、所緣の佛子と云ふ思想が大涅槃經その他に說明されて居るのである。然るに佛子の自覺に立たず、汎神論的に佛性のみを論じて、それを開發する偉大なる絕對の人格者が明かでないと云ふならば、佛教と云ふものは頗る不徹底なるものと云はなければならぬ。所が多くはさう云ふ所に止まつて居る、禪宗の敎義の結論は矢張りそこである。天台なども一面には偉い事を云つて居るけれども、止觀の己身を觀ずると云ふことは佛性論に致されて居る。又眞言の佛身觀なども同樣である。故に どうしても佛教徒は、佛性論より進んで如來との關係を明かにして、客觀の人格實在に達し、それに導かれて菩薩行に入り、願波羅密を起して奮勵努力せねばならぬのである。此等の意義が、この大法鼓經に於て頗る强く說かれて居るのである。佛性常住に止まつて居つてはいかぬ、如來の妙色 常 住を信じなければならぬ、それが今の言葉にすれば、人格實在論である。

第三には、如來を觀るに、普通は法身に就て實在を見て居るのである。普通の佛身觀は法身論である。それは非人格であつて、普遍我とか宇宙の大生命とか、宇宙的精神とか云つて居る說は法身論である。それが人格實在の意義に進まなければ宗敎の結論には達しないものである。然るに其處に進むことが出來ずして法身論に止めを刺したと云ふのは、佛敎に大なる禍をなして居るのである。隨つて釋迦中心の思想も分らなくなる。法身は普遍的であるから何でも現れる、現れるものは佛であると云ふことになつて、釋迦も現れ、何も現れ、その根本に名もなければ姿もないと云ふやうなものである。然るにこの大法鼓經に於ては、人格實在の意義を示して、洵にそれが明瞭である。私はその點は、法華經の壽量品を助けて居る經典として尊敬すべきものであると思ふ。吾々は壽量品の顯本の思想を力說して居る上に於て、この法鼓經を見て、如何にも斯の如き經文のあることを喜んで居るのである。全く吾々の主張に大なる援軍を得た心持がしたのであります。

第四には、諸佛と釋尊との關係を明して居ることは 是亦大切なることである。それを輕々しく釋迦を捨てゝ諸佛に行くとか、その諸佛の中の他佛に行くと云ふ思想は頗る不都合なことである。大義名分と云ふことは宗敎でも云つて居るが、釋迦敎徒が、釋迦牟尼を輕く見るとか、捨てると云ふやうな大事を決せんとするには、それに對して十分なる考察を經てやらなければならぬ。それにしても到底正しいものは出まいけれども、兎に角も考察をしなければならぬ。然るに輕々しく釋迦を捨てると云ふのは、實に輕佻なる態度であつて、恰度今日日本の國體の問題に關して輕々に論じ去らんとする人があると同じである。勿論釋迦に關する思想は、佛經の何れにも出て居るのであり、又佛敎の歷史に就て見ても、多くの宗敎家が尊崇したのであるけれども、それは根據を明かにして居らぬのであるから、そこで、少し强い思想、眞言とか淨土とか華嚴とか云ふやうな思想が起ると、それに打ち破られるのである。之も頗る重大なることを意味して居ると思ふ。日本の皇

室の尊嚴を維持するに、唯皇室を有難いと言つて居る、それで濟む時代ではない。阿含經でも釋迦が大切だと云つて居る、倶舍宗、成實宗三論宗皆さう云ふ風で來て居つたが、華嚴が起つて破られ、眞言が起つて破られたと云ふものは、釋迦中心の意義に就て、十分にその根柢を突止めて居らないで、唯ボンヤリ釋迦が有難いと定めて居つたから、後にはそれを、何の應へもなくやられてしまつたのである。今我國に於ても、或る方面の皇室中心の叫びは、非常な範圍にあるけれども、その思想は十分の根據を置いて掛らんければ、唯所謂官僚的と云ふか、形式的と云ふか、日本はさうぢやないと云ふやうな壓迫的なることを以て、この思想の戰を切り拔けやうとしても、それは益々一方の反抗を來すのである。畢竟國家の權力を後援にし、或る種の形式を以て他の思想を壓せんとするのである、思想の內容に於て、十分の理解と根據とを有つて戰ふに非らずして、左樣なる形式を以て人の思想を壓せんとするのである。一方は又、その思想の內容の特質に注意を拂はずして、權力を以て壓せんとするから、それに對して思想の自由を主張して、自由の後に起る思想の內容は兎も角も、自由だと云ふ。一方は又その思想の內容に注意を拂はずして、權力と形式で行かうとするから、そこでガチャ〳〵云ふのである。寧ろそれは、吾々の考から見れば皮相淺薄の戰であると思ふ。そんな所に掛つて居るのは孰れも幼稚であると私は思ふ。一國の重大なる國體を闡明しやうとするには、單に之を權威や形式に依つて維持せんとするのは、全く時代後れと謂はなければならぬ。又一方、自由を楯に取つて、內容の如何を顧ずして戰はんとする、之も考が足らぬと思ふ。左樣な淺薄なる思想の戰は、甲乙孰れも價値なきものである。恰度それは今言つた、釋迦を尊敬すると云つても、その奧を突止めて居らない思想、又それを捨てるにしても、輕々しく諸佛は平等である、法身は平等であると云つて、捨てたと同じやうなことである。佛敎に於てもそれが多大の累をなして、今日佛敎の振はぬのも、統一することの出來ないのも、皆そこから來て居る。將來日本の人心が紛亂を來して、國民思想の統一を破ることになるならば、この二つのものは倶にその責任を負はなければならぬと思ふ。所がこの大法鼓經の思想の如きは、明かに釋迦中心の意義を示して、大いに釋尊の御名に於て、その釋尊の御名を唱へることに就ての功德が稱讃してある、さうしてそれに、非常に意義ある說明が附いて居る。是は明かに法華經壽量品の思想を助けるものと如何にも愉快に感ずる次第である。

第五には、正法を護ること、即ち護法の道念は非常に大事であるが、唯道念のみに止めて置かないで普通はそれを護持すると云ふが、唯護持するだけでは駄目だとこのお經は說いて居る。自分に如何に正法を護持する精神があつたからと云つても、その正法を破らんとするものゝあるのに、唯自分が志だけ懷いて居つても駄目である、進んでその非法の輩を折伏しなければならぬ。國を念ふと云つても、その國が破れやうとする時分に、唯國を思ふばかりで傍觀坐視して居る者は決して愛國の徒ではない。護法心があるからと云つて、法が破れんとして居るのに坐視傍觀して居る者は駄目だと云ふことを、このお經は明かにして居る。而してその活動が最も適切で

なければならぬことを說かれて居る所に、是亦日蓮主義者の最も良き參考となると思ふ。日蓮聖人の薫陶は、確かにこのお經に說いてある趣旨と同一轍であると思ふ。

尙このお經には、佛敎の方便の說に迷ふ者を折伏する意味が能く現れて居る。元來法華經は、佛敎の方便說に囚はれた者を覺醒せしむる爲に起つたのである。開顯と云ふことは、一方から云へば方便說に迷つて居る者を匡正する思想である。このお經は矢張同一の方針で、方便說に惑ふ者を折伏する敎訓が澤山出て居るのである。その點に於て大法鼓經と云ふ經題も出て居る。鼓は、鼓を鳴らして攻めて掛ると云ふ意味で、この鼓は優しい方の鼓ではない、戰に使ふ鼓である。それは經文に出て居るが、鼓には天鼓、毒鼓の二た通りある。天人の擊つ平和の鼓、戰鬪に使ふ鼓である。この大法鼓は、戰鬪に於て敵を進擊する所の鼓である。その意味が寔に能く法華經の思想を合して居る。故にこの大法鼓經の思想を宣傳して、我國の、方便說に囚はれた佛敎徒を覺醒し、健全なる佛敎の眞精神を發揮して、今後人類全體に釋迦牟尼の敎を普及せしめなければならぬと思ふ。佛敎の萎微振はないやうになつたのは、僧侶の人格にも依るけれども、佛敎の解釋に於て、氣の拔けるやうな解釋をして居つた點がある。先づその敎義が、人を活かす力を與へる敎義でなければならぬ。その敎義が、人の力を拔くやうな說明になつて居つて、さうして力ある人を求めてもそれは得られない。敎が本であるから、佛敎の解釋が大事である

（第二十九頁下段につゞく）

日蓮主義より見たる無量義經（第八回）

井村日咸

示爲丈六紫金暉——成就如是妙色軀（八、五——九、末）

此十四行の文は『第四に四八の相に約して內證身を敷ず』る一段である、如來は衆生を敎化せんが爲めに和光同塵して、凡界に其身を示現し給ふ、如來の證悟は無邊際にして限量あらざれども、衆生應化の必要に依つて、有限有量の身をお示に相成るのである、此を應身と云ふ、衆生に應化するの身と云ふ意味である、此一段は應身の身相を讚敷したので、始の一行は『總じて紫金法身の躰を敷ず』て應身佛の全躰を一言で敷じたのである、本佛釋迦牟尼佛、我婆婆世界の衆生を憐愍して中印度迦毘羅衞城中に降誕し給ふ十九にして生家三十にして成道して給ひ人天の大導師と爲り給ふた、御身の丈壹丈六尺と傳ふ、此尺は周代の尺で、唐代の尺にては八寸に當ると言はれて居るか、其唐代の尺が現代の尺に比べて何寸かゞ判明しない、隨て現在の何尺何寸の御身長であつたかは分らぬが、古代の人は現今の人よりも巨大であつたことであらうし、其中でも如來は偉大なる躰軀であつたことゝ略推察が出來るから、丈六と云ふてもそんなに驚くにも當るまい、兎に角普通の人と相對して談話の出來る程度であつたことは明瞭で

ある、教化の爲に示現した以上はそうでなければならぬ、奈良の大佛式の佛では我等が世界には實用にはならない、紫金の暉とは如來の身は紫摩黃金の光ありしと云ふが、特殊の光を發せし如く感得せられたものであらう、全身圓滿完全にして非議すべき點なきが故に方整照曜として甚明徹なりと讃めたのである、以下三十二相に就て一々に細釋したが、其全躰を一括して玆に斯ふ云ふた釋である、「毫相月の如く旋れり」の下は『別して四八の相を數ず』るのである、三十二相の名稱に就ては經文に依つて必しも一致しては居らない、普通は阿含經に依つて居るが、今經は現文に三十二相を擧げて居る、其順序は阿含と異り、相好にも多少の相違はあるが大體は異ならない、今は此經に依つて三十二相を數へやうと思ふ、初一句は眉間白毫相(一)と圓光相(二)である、兩眉の間に白玉の毫あり清淨柔軟にして右に旋り宛轉して常に光明を放てりと云ふが白毫相である、圓光相とは木像杯には佛像の後に圓い形の光を發して居るものが作つてあるあれであるが、項即ち頭の後より日光の如き光を發したとある、次の一句は旋髮紺青(三)と肉髻相(四)である、普通には旋髮と紺青とは二相に分れて居るが此經には一相としてある、如來の頭髮は皆右に卷いて上に向つて居るとある、又其色は紺青の如くとあるから、此は吾々の好む頭髮の持主であつたのである、肉髻相は或は無見頂相とも言ふ、頂の上に肉の高く隆起したものがある、其肉髻相は一切の人天二乘菩薩皆見ること能はざるが故に無見頂相と云ふのである、此相は父母師匠を尊敬した功德に依つて得給ふた相好と言はれて居る、此に反して父母師長を敬はざるものは人より見下さるゝ相を得る譯である、淨眼明鏡(五)は眼の相好で、冷しい眼かバッチリとあひて居る形で、眼は顏の相好の中では大事な處であるがこれが申分のない形をし居るのが淨き眼明鏡の如しである、「上下に眴ぎ」(六)とは眼色金精相と言ふて、眼から光が出る、眼光射るが如しと云ふのである「眉睫紺にして舒び」(七)とは牛王睫相で、眉毛や睫が長く舒びて、牛のそれの如くであると云ふ、「方しき口頰」(八)とは頰車如師子相と言ふて兩の頰が師子の樣にフックリと鼓らんで居る、ヤセコケタ樣な貧弱な相でない、「脣(九)舌(十)赤好にして丹華の如く」と脣や舌が眞赤で赤い華の樣な色であると云ふ、態々紅をさす必要も無い譯である、「白齒(十一)の四十(十二)なる猶ほ訶雪の如し」、齒の白いのと、數の四十あるのが特殊の相好である、普通の人の齒は三十二枚である、稀には三十六齒ある人もあるが、佛の齒は四十枚あつて、皆白く淨く齎密で其根か赤堅固であると言はれて居る、「額廣く(十三)鼻脩く(十四)面門開け(十五)」の一句は三相ある、額の廣いのも鼻の高いのも上々の人相である、面門とは口の事である、開くとは佛は瞋相を離れ給ふが故に佛口よりは常に慈悲の御聲か漏れて居るから開くと言ふのである、「胸に萬字を表し」(十六)師子の臆(十七)なり」、如來の胸には卍か表はれて居つたと言ふ、其證悟の圓滿なるを表示したものである師子の臆とは身體平正にして威儀嚴肅なること師子王の如くなる其堂々として怖畏すること無き相を師子の臆と言ふたのである、「手足柔軟(十八)にして千輻と具す(十九)」二相である、千輻を具すとは手の裏や足の底に輪紋あり て衆相圓滿にして千の輻輪の如くなるを千輻輪相

と云ふ、吾人にも手紋はあるがあまり恰好の好いのは少ない、「腋(二十)掌に合縵あつて(二十一)内外に握れり(二十二)」腋の下や手の内面に縵網交合して畫を畫いた樣になつて居り、手の指は外にも握れると云ふ女の人には半分位外に折れる人はあるが全部折れる人は無い樣である、佛のは外にも握れるとあるから中々重寶な御手である、「臂脩く(二十三)肘長く(二十四)指直く纖し(二十五)」、如來直立し給ふ時は御手が膝を過ぎ給ふたと云ふから臂も肘も長いのである、「皮膚細輭にして(二十六)毛右に旋れり(二十七)一孔一毛覆れず整々として皆右に旋つて居つたと云ふのである、「踝膝露現し(二十八)陰馬藏にして(二十九)」て二相である、踝や膝のはつきり外部に露出して居るのは無病の相である、踝や膝が隱れる程ブク〳〵して居るのは病氣の相である、佛は無病の相を現はし給ふて居るのである、陰馬藏とは佛の陰部は馬のそれの如くに内部に密閉せられて外からは見ることは出來なかつた相であつた、婆羅門の或者が夫を見て釋迦は不具であると言つた事があつた、そこで釋尊が多勢の前で、陰部を露出して見せられたことがあつたと御經文に出て居る、有つても無い樣に見えた處が特殊の相好である、「細筋(三十)鎖骨(三十一)鹿膊脹なり(三十二)」、身體の筋肉骨組の完全した處を言ふたのである、鹿膊脹とは足の腦が鹿の樣に漸次に纖く圓くなつてスラリとして居る相で端正の相なりと言はれて居る、以上三十二の數を擧げてあるが、此數へ方は經文に依つて異なることは前に言ふた通りである、御遺文の中に三十二相の中に梵音聲相ありと云ふてあるか、此經文には數へられて居ないが、阿含經杯には一相とせられてある、此經は次下に如來の說法を特に讃歎したから、此處では除いたのである、以上三十二相の全體を結歎して「表裏映徹淨くして垢無し、濁水も染むること莫く塵を受けず」と言ふて如來の相好は凡て清淨無垢であることを言ふた、更に三十二相の外に八十種好とて八十の特徵を數へるが此には細目は略して「八十種好見るべきに似たり」と云ふた、此「見るべきに似たり」と言ふ言葉が意味深長である、斯樣に三十二相八十種好と如來の御相を數へるが、此相好に囚はれて着心を生じてはならぬ、如來の眞實相は左樣な形式の相好で彼此言ふべきものでなく、形式のみで如來を見るならば其は誤であるが故に「見るべきに似たり」と言ふて次の句に直に「而も實には相非相の色無し一切有相の眼の對絕せり」と言ふて來た、其囚れを除き着心を生ぜざらしめんが爲に、其相を否定して、如來の眞實の相好は我等か肉眼の對象として見るを得べからざるものなるを說いたのである、如來の本體は實相の理境にして無相の身なるも、而も衆生を化導せんが爲には衆生の眼前に示現すべきの要がある、此場合に即ち三十二相の身を示現するが、此を「無相の相にして有相の身なり」と云ふたのである、「衆生身相の相も亦然なり」とは我等衆生と雖も其本體は無相であるが、隨緣煩惱の爲に現在の身相を現ずるので、如來の示現は衆生化導の爲であり、我等の示現は染分の身隨緣顯現したもので、無明に依りて緣起したものと慈善根の力より緣起したものと違目があるのである、斯くの如く如來の示現の慈善根の力我等衆生を憐んで降誕し給へる佛陀なるが故に、「能く衆生をして歡喜

（第五十二頁下段につゞく）

人間苦と日蓮の信仰

國友日斌

昨秋軍艦新高が北樺太で沈没した時の事を新聞で讀んだ、港に停泊して居た新高は、不意の突風に襲はれて顚覆した、そして艦底を上に眞逆立ちになつた。甲板で働いて居た將卒は悉く波にさらわれたが、艦底に居た機關兵十二三人が不思議に助かつた。然し甲鐵張りの底を天井に、すつかり閉ぢ込められたのだから、無論光線も空氣も通はない、逃路もないし、食物もない、救援はいつ來るか、來ても彼等を發見し得るか、全然希望なしに、そして眞つ闇な晝とも夜とも分らない數日が經過した。人は飲まず食はずに、二十日や三十日は生き得るそうだが、水なしに魚は生き得ざるが如く、新高艦の生存機關兵にとつて、一番大きな問題は呼吸する事であつた。狹い艦底の間隙に十二三人が數日、十數日を暮した、空氣は次第に濁つて來るし、呼氣は苦しうなつて來た。……救ひの手が甲鐵を打き破つて、ヒョロ〳〵になつた、幽靈の樣な彼等を艦底に發見した時、十二三人の口は、云ひ合せた樣に、隣室へ通ふ扉の鍵穴に蜻蛉の樣に吸ひついて居たそうだ。こんなにして迄も彼等は生きて居たかつたのだ。

人は生命に對する强烈なる執着がある、その爲には親も、兄弟も、名譽も、金錢も、戀も、一切を犧牲にして、生きようと努力するが、然し自然の手は默つて一切の人を死の國へ連れて行く、そこに生爪をもがるゝ樣な苦みがある。

又人には飽くなき欲望がある、そして若し本能的に起つて來る强烈なる欲望を、大きな手が壓迫した時、のた打ち狂ふ樣な悶えが起つて來ねばならない。私は監獄に囚はれて居る女囚の悶えについて聞いた、彼等は食物に對し、娯樂に對し、自由に對する、一切の欲望を我慢させられて、强い性の刺戟に苦しむ。男囚の汚物を、餓鬼の樣に爭ふて洗濯する光景は、實に淺間しい限りであるとのことだ。

人間の强い苦しみと悶え、是位眞劍なそして差し迫つた問題はなからうと思ふ、然も若い人達は覺醒しない、そして本能の衝動のまゝに、幻影の樣な歡樂を追ふて暮して居る。彼等の進み行く前途には千尋の斷崖が横つて居るのだ。「危いぞ」と叫ばれたのが御釋迦樣である、佛樣の敎を道學先生の口吻によつて傷けてはならない、佛樣はたゞ無暗に歡樂を厭ふて禁欲生活を說いたのではなかつた、達人の知見と慈愛を以て、泥溝へはまつてはいけないと訓へられたのだ、若し人が歡樂を求めて歡樂を得るならば、或はそれでよかつたかも知れない、明珠を尋ねて瓦礫を手にす、百萬の枯骨を積んで一戰の勝者たる時、凱旋將軍の胸に深く刻まれし悲哀があり、敗慘者の膏血を絞りて一代の富を集め得たる時、飽くなき欲望は炎々なりて內部より彼を燒き亡さんとす。

人若し唯だ歡樂の爲に生きんとするならば、最後失望の悲哀は苦みの人生を招來せずばおかないと云ふ事を佛樣は訓へられたのである。

吾人は人間苦に就て徹見せねばならない、これが一切の問題の根抵をなす、人間苦に觸れずして何の修養ぞ、何の宗教ぞ。勞働運動であらうが、思想問題であらうが、其他一切の事柄は、人が本當に苦しみに覺醒めて悶え初めた時、その價値も奥味も一時に消失してしまふ、眞に悶えて居る人には悶える事それ自身が全部であるのだ。佛樣の教は迂遠な、そして野暮な說教ではなかつた、人間苦を徹底的に說明して、これを解脫する道を指示せられたのである。

佛樣の救ひを未來の事と考へてはならない、死んだ後の事なんか、どうなつたからとて强く吾人を引きつける力は無い筈だ、人間は現在直ちに慘憺の極に沈淪して居る。敗慘の落伍者は元よりの事、浮ついた景氣に調子づいた商人が、其の事業の根抵に火が廻つて、今にも倒產しそうな危險に氣が付かずに、ウカ〳〵と暮して居るとせば、痛ましき限りと云はねばならない、佛樣には絕大の知見があり慈悲がある、その救ひの手は直ちに人間苦の現在に向つて投げらるべきである、現在が苦しいのだから、現在を救はうとする、吾人は死んだ後西方淨土へ往生して、それで滿足しうる程呑氣な人間生活を營んで居るのではないのだ。

國民性に就いて（三）

文學士　武田顯龍

忠君愛國に就いて述べた私は更に進んで包容性等に就いて述べて見たい我國の文明を大觀するに精神的方面にせよ物質的方面にせよ國民の創造に成るものは殆ど無くて量に於ては其の大部分が外國の模倣であり質に於て其の主要部分は外國からの輸入に過ぎない。

我國の精神文明の根幹は神儒佛の三道であるが佛教は印度の教であり儒教は支那の教であつて我國個有の文明としては僅に神道あるのみだが神道は量に於ける大部分は所謂神話であつて其の質は即ち建國の理想國體觀念及び赤淸直正等の道德思想である。

然し神道では宇宙觀人生觀の哲學的方面正義公道等の倫理的方面或は經濟的方面に於ては儒佛二教に劣ること數等であつて到底世界の學界に重きをなすことは出來ない、斯かる神道の缺陷を補ひ更に進んで我國の文明をして世界に重きを成さしめた根素は儒佛二教の賜である。

支那文明の我國に渡來したのは神功皇后の征韓役以來であつて韓土を經て我國に傳はつたのであるが學問が渡來したのは應神天皇の朝百濟から阿直岐と王仁が書籍を携へて來朝し皇子稚郎子が此の二人に師事したのに始まると傳へられてるが爾來壹千六百

有餘年の星霜を經て居る。佛教の我國に渡來したのは神武紀元千二百十二年欽明天皇治世十三年百濟の聖明王が佛像經文を献じたのに始まると云はれて居るが當時の我國の政狀は天皇は上に在ませども實權は蘇我氏と物部氏との對立てあつて是が進取保守の二派に分れ進歩黨の代表者蘇我稻目は佛教崇拜を主張し保守黨の代表者物部尾輿は排佛を主張して共に下らなかつたが此の爭は子供の代にも及んで稻目の子馬子は佛教を奉じ尾輿の子守屋は排佛を主張し爭は益々烈しくなつて敏達天皇が崩御せられると此の爭が皇位繼承問題と結び付いて國權危く見へたが既戸皇子聖德太子が奉佛の主張を以てよく時運の急を救ひ守屋を誅して事なきを得た、爾來佛教は盛となつて大化の改新前太子の治世中已に寺は四十六個所僧は八百十六人尼が五百六十九人と云ふ狀勢で逐次佛教は全國に其の勢力を蔓ばしたので年を經る已に千三百七十有餘年になつて居る、此の永い年月の間支那文明と佛教とは或は經となり或は緯となつて我國民の精神を支配して居たのであるが然し日本の文明は必しも支那文明と同一てなく又印度文明たる佛教と同一てはない、即ち支那文明及び印度文明は我國文明の血となり肉とはなつたが然し骨迄になつて居らぬ假令骨になつたとしても手先き足先きの骨であつて背骨にはなつて居らない。自分自身の文明即ち骨を失はずに此の骨に血となり肉となるべく支那文明或は印度文明を持つて來て然も其處に矛盾を惹き起さず在るべきものが在る樣に調和の狀態を保つて居るのは我國民の包容性の然らしめる點てある、更に明治維新以來西歐文明は滔々として我國へ這入つて來たが此の歐米の文明は色々な點に於て日本文明とは異つて居た。從來の日本文明が主として精神的てあつたのに歐米文明は主として唯物的てあつた、日本の社會制度が封建制度を續けること甚だ年月が永かつた爲に國民精神が兎角退嬰的氣分に富み且つ依他依存の考が餘程强かつたのに歐米文明は進取的氣分に富み主我的な考が非常に强く我文明に在つては日常の道德は報恩觀念を基調としたのに彼等は權利義務を基調として居る、我國の社會組織が差別的な考に支配せられて居るのに彼等は自由平等の社會組織を主張して居た、我國の道德觀念が儒教の仁佛教の慈悲即ち近きより遠きに及ぶと云ふ差別的な階段的な愛を以てして居たのに彼等は基督教の所謂無差別的普遍平等的な愛を以てして居た、斯ふ云ふ事は單に我國從來の文明と歐米文明とのホンの異目の一端だが此の異つた文明が維新以來輸入された時に我國民は是を排斥するどころか是が模倣と輸入に日も足らずと云つた有樣で維新明治十八九年頃國粹保存主義が唱へられ又其の後是とは多少意味は違ふが高山博士一派の日本主義者の運動もあつたが兎に角鹿鳴館當時の樣に歐化主義は總ての方面に於て大正十二年の今日も尙ほ依然として續いて居る。

斯の樣にして歐米文明と日本舊來文明とは時に矛盾し時に衝突すると云ふ狀態で恰も囹ひ者の妾を本妻に直したいのは山々だが、と云つて精練の妻は義理の上から捨てるにも捨てられず情の上から未練も殘つて居ると云ふデイレンマの狀態である、即ち妾の所では洋服の尻をまくつてストーブに暖るのに本妻の所では丹前姿で茶の間に納まると云ふ有樣で二重生活の根據は形體的にも精神的にも此處に在る。

然し國民は此の二重生活の煩に堪え得ないで歐米文化を我物としやうと努力し又徐々に我物としつつある樣に自分は思ふが是は國民の包容性の然らしめる處である。

然し此の包容性は法華經の開顯主義を缺いてはならない立正大師聖日蓮が一切經に法華經の壽量品ましまさずば天に日月の無きが如く地に大王の無きが如く山河に珠無きが如くで、しかも佛は大妄語の人となると云はれた樣に又聖德太子が「如來即ち萬德の嚴軀を動して眞金の妙口を開き廣く萬善同歸の理を明して莫二の大果を得しめたまふ」と云はれた樣に又道元禪師が「法華經は諸佛如來一大事因緣なり大師釋尊所說の諸經の中には法華經これ大王なり大師餘經餘法は皆な是れ法華經の臣民なり眷屬なり法華經中の所說これまことなり餘經中の所說みな方便を帶せり佛の本意にあらず餘經中の說をきたして法華經に比較し奉らん是れ逆なるべし法華の功德力を蒙らざれば餘經あるべからず餘經皆な法華に歸投し奉らんことを待つなり」と云はれ又白隱禪師が「本門壽量久遠實成の如來は目前に分明に推せども去らて此の時に當て天臺の法性寂然寂而常照の寶所に投入し眞言の阿字不生の慧日に照され律宗の諸佛無上の金剛寶戒に冥合し淨土の即心往生極樂報土の素懷を遂げ水鳥樹林念佛念法念僧の妙莊嚴をまのあたり見屆け娑婆即寂光の正眼を開き草木國土悉皆成佛の田地に至らん事毫釐も相違あるべからず」と云はれた樣に法華經が根底となり土臺となり法華の光を受けて始めて餘經は存在の意義を有つて來るので法華經と云ふ幹を離れては諸經と云ふ枝葉は枯れると云ふので枝葉を繁らせるのは幹を養ふ爲てあつて幹がウンと太くなれば差迄枝葉が必要でないと同樣法華經が顯はれた時には諸經は差迄必要でないと云ふのが法華の所謂開顯主義で立正大師日蓮の主張の重要點は此處に在る即ち混亂雜然たる一切經に其の統一點を示し紛亂たる佛陀一代の敎說に其の依て來たる原因と歸着點とを示したのが即ち開顯主義てある、此の開顯主義を我國文化撰擇の上に移す時は即ち我國民は時の古今を論ぜず洋の東西を問はずに有謂世界の文化を包容攝取したが此の世界文化の包容攝取に當つて唯無批判的に包容攝取して其の統一點を提示せず根本歸着點を明にしなかつたならば如何に文化が盛になつても其處には力もなく生氣もなく眞の文化と云ふことが出來ない。八百屋店の萎びた菜大根と同樣てあつて國民の營養素にはならない。

我國文化の根幹となり歸着點とも云ふべきは皇基の振起と云ふことてある五ケ條の御誓文に廣く智識を世界に求め大に皇基を振起すべしと」あるが是は我國文化の開顯主義からは壽量品の立場にあるものてあつて是を土臺とせねばならない。皇基を振起する處其處には必然的に公義正道の實行が伴はれ皇基を振起する處其處には世界の恒久平和と人類共存とが蓋然的に伴はれる以上皇基の振起と云ふことは決して頑迷な國家主義の主張ではなくて實に堂々たる理想て世界文化の中に押し出して無比の理想てある、我國の有謂文化運動は是が根本精神とならなければならない政治經濟倫理宗敎哲學皆な是が根本土臺とならなければならない、是を缺いた文化の包容攝取は兎角文化の中毒を惹き起し易いものてある、包容性は得て模倣に陷り易く模倣は得て獨創力を

減殺し勝ちである、我國民性が包容性に富むと同時に模倣に急であつて獨創力を缺くことは大に遺憾に思ふ點である。ラッセルが創造本能と所有本能とは人間の根本衝動だと云つて居るが近來の我國民には所有本能が根本衝動だと云ふことは認められるが創造本能が根本衝動だとは認め難い、僅に此の點を認められるのは子供を造ることの上手な位なものである。立正大師日蓮聖人の如きは多くの宗教家がよくやる佛教内だけに閉ぢ籠つてお山の大將俺一人の弊から脱して和漢並に佛教書を讀破し是を採長補短よく包容融和し更に進んで和歌並に神道を研究し法華經研究に於ては前人未踏の境に進み神儒佛三道の眞髄を把握して打つて一丸となし其の體道たる宗教的本領の上に於て用道たる國體の説明國家經營の方針に於てよく新機軸を提唱したのは實に包容と創造とを兼ね備へた賢者と云つてよいと思ふ。自分は時運艱なる時大聖人の風格を慕ふの情切なるを覺える。

（四十三頁よりつゞく）

して禮し心を投じ敬を表して慇懃なることを得せしむ」と説かれたのである、「是れ自高我慢の除るに因て是の如き妙色の軀を成就し給へり」とは三十二相を成就し給へる宿の因行を擧げたので、此は擧一例諸と云ふて其中の一つ丈を擧げて他は略せられたのである、寶女經には一々に其宿因を擧げて説いてある、自高我慢の心無きが故に父母師長を恭敬す、其因行に酬て無見頂相を得給ふたのである、有相の身に因はれてならぬから一旦は否定はしたが、我等衆生は有相の佛陀に救濟るゝが故に再び有相の身を肯定して其宿因を明したのである。

記事

各地教信

名古屋地方　一月八日常德寺に於て妙教婦人會新年會を開き中山事信師、清水一乘師の講演があつた外國友日斌聲正の「日蓮主義の眞意義」と云ふ題下に依つて聽衆の肺腑を貫き實生活に突入した頗る有益な講演があつた後新愛知章話團員瀧豐子嬢の「龍の口」長柄の秋風」琵琶二曲彈奏あつた外福引甘酒で各自歡を盡くして意義ある新春の夜を更かした。△十二月十八日大垣市常隆寺に於て十二月例會を開いた後の降る寒い夜で清水、國友兩師の講演があり佛さまの眞實の救ひについてしんみりした話に一同感激しつゝ散會した。△一月三日伊勢龜山町で佐野きくと云ふ老婆が今回の大師號宣下をお祝ひしたいと考へて微力乍ら奉祝會を催した。大雪の日で東海道線すら故障があつた位だつた寒發計は零下七度八分に下がつた鈴鹿颪はヒユーヒユーと荒れてゐたが、無名のお婆アさんの赤誠が信者を動かしたのか、お婆さんの住むかなり廣い田舍屋にも溢るゝほど參詣人があり、妙齢の婦人が甘人ばかし色を彩えてゐた、晝は奉祝法要後國友聲正の「大師號宣下と立正大師の主張」と云ふ講演があり、夜は寒風を犯して一同龜山の街を提灯行列をし高田派門徒の心誠を一層寒からしめた。

大阪教報　十一月十九日蓮成寺に於て宗祖會式擧行し法要慶修後直に講演會を開き十一時散會す

△二十日午後一時より大師號宣下慶讃會法要慶修後講演會を開き開會山主「大師號宣下と教團の融合」有田宏道師「立正大師の高德」萩原日道聲正の講演があつた△二十四日三五會清原淺治郎宅開會「日蓮門下の本領」上田智量△二十五日野坂健二宅講演「信者の自覺」上田智量△十二月三日蓮成寺例會佛教徒の本領上田山主△九日三五會清原淺治郎宅「立正安國」上田智量△十三日蓮成寺如說修行上田智量「日蓮聖人の主張」京藤義應師△二十三日蓮成寺「信仰の德と力」京藤義應師「新年を迎ふの準備」上田智量

大阪砲兵工廠講演　同廠中に組織せられし義勇會は十一月十四日本多聲長稅下を招聘し講演會を開催し稅下は修養と德教の題下に講演せられ二百餘名の聽衆に非常なる感動を與へた。

第三教區の活動　▲十一月二十日長生郡長柄村結木安樂寺に於て例會を開き全員出席諸般の協議を爲し布教上の打合せをして十一月二十四日茂原町市場に於て道路布教を開演したり▲十一月三十日市原郡富山村小谷田妙典寺に於て講演會を開催戸谷好雄、海老澤乾樹、栗原瓢有師の雄辯を振はれたり▲十二月三日長生郡二宮本郷村本源寺に於て第三教區寺院並に信徒聯合して立正大師謚號宣下奉祝大法會を開催したり中村聲正、武田社會部長の出席を仰ぎ頗る盛大なる法會と講演會とを開き其の效果はやがて何等かの響きをいたすものと信ずるものあり▲十二月八日茂原町内長谷妙題寺に於て例會を開き全員出席年度終了の結束を告げ諸般の報告ありて閉會▲十二月十九日本年度最終の道路布教を爲し目出度本年の布教團の使命

を終つた。

第五教區第二部聯合立正大師諡號奉戴式

去歲十二月二十七日午前十時より千葉縣山武郡土氣本郷町土氣善勝寺に於て鈴木土氣町長、山田山添村々長主催にて擧行し出席僧員二十餘名參會し布教師渡邊日命師琢師となり莊嚴なる奉祝大法要を行つた、式後土氣驛に本多管長猊下を奉迎し、土氣尋常高等小學校講堂に於て本多猊下の『思想律と立正大師』てふ題下に講演がありて午後四時閉會した聽衆五百余名。

金澤日蓮主義布教宣傳

△十二月三日午後七時於倭氏宅、「我國體と思想問題」、本郷常次郎氏△十二月十一日午後七時於島村氏宅、「日蓮主義の三大特點」、本郷氏△十二月十三日午後七時於京崎氏宅、「受持成佛」、本郷氏△十二月二十二日午後三時於本長寺「信仰の策勵」本郷氏「具足之道」、富田繞榮師△十二月廿六日午後七時天晴會「法華經講義」富田師「本尊論」石橋會章師「日蓮主義社會觀」吉倉水央氏「無量義經講義」本郷氏△十二月十八日午後二時於本行寺「日蓮聖人傳」石橋師。

伯耆松崎

△十一月四日青谷統一團支部に於いて「日蓮主義綱要其五」富田師。△十一月五日夜松崎本立寺に於て聖樂園例會同催「正法護持」富田師。△十一月十八日統一團青谷支部に於て謹發奉戴慶讃會擧行、法要、後講演「謹發道場と吾人の覺悟」中島孝治、「立正の意義」富田師、△十一月廿六日午後二時より本立寺に於て「宗教の本質」富田師。△十一月廿七日本立寺に於て「宗教の本領」富田師。△十一月卅日夜より本立寺にて舊御會式法要後說教十二月一日午後一時同會式修法後說教「本化の妙信」富田師。△十二月四日青谷統一團支部例會に於て「日蓮主義綱要其六」富田師。△十二月十三日午後正一時より松崎本立寺に於て謹發宣下の慶讃大會を同催す、即ち東伯郡日蓮主義布教團員出席修法、祝文、祝辭、萬歲三唱を終りて講演し講演後祝宴複外信徒出席者六十名其他聽講者等にて未曾有盛會「立正主義」富田日進、「日蓮主義者の態度」中島孝治「謹發宣下と吾人の覺悟」星合孔章。△十二月廿五日統一團青谷支部例會にて「佛道の講練」中島孝治、「日蓮主義綱要」其七富田日進、△十二月卅一日別所長榮寺に於て各宗共同布教(道交會)の際「法悅の生活其二」富田日進。

東海道監督布教記

國友日斌

大正十一年十二月六日伊勢四日市を振出しに、松本布教師と同道して、東海道各地を巡教した。大師發宣下に關し、立正大師の人格と主張に關し立正結社の組織に關して說いた。比較的無信心な東海道の各地で、講演を聞いて泣いて居る聽衆を見うけた、餘程今度の勅諭立正大師は信者の頭に響いて居ると思ふ。

△六日、四日市安樂寺、聽衆本堂に滿つ△七日、名古屋靈山寺、聽衆三十△八日名古屋常德寺、聽衆百餘、講演後立正結社幹部の協議會を開いた、今晩に限り特にメートルが上つて、はては常德寺の四畳半の小間へ、二十人近くの善男善女が這入り込んで、尼張門徒を一ひしぎに取り潰す樣な話をして居た△九日晝、緒川藤境寺、聽衆三十△同夜、刈谷長遠寺、聽衆三十五△十日駿河老松野妙松寺、聽衆百五十△十一日晝、大土肥妙高寺、聽衆八十△同夜、三島本妙寺、聽衆八十△十二日夜、見付玄參寺、この夜名古屋地方は尺餘の大雪が降つた、見付では遠洲名物の空風が吹いて居た、猛烈な聽衆が三千程集つた△十三日吉美妙立寺、講堂に滿員の盛況△十四日晝、田原當行寺で盛んな奉祝法要を營し、本堂に溢れた參詣人の數は五百を越えたと思ふ、△同夜　野田法華寺、聽衆七十、之で巡教を終つた。

昨年度の統一團千葉支部

大正十一年度統一團千葉支部に於ける事業及經過は左の通りである當支部は大正十一年二月廿八、九の兩日に亘り本多管長猊下の御親教を請ひ莊嚴なる法會と盛大なる講演會を開催して其の發會式を擧げたるのを始めとして千葉各教區に於て講演會或は路傍に立つて布教すること三月十一日より十一月廿五日まで總計三十餘回此の聽衆合計五千人の數く可き多數に達し會合毎にその實を擧げ統一團支部の存在を確立し團員の運動の効果を世間に認識せしめたことを吾等は信ず。

大阪本化聖教團の諡號宣下奉戴會

同團は十二月一日中の島中央公會堂に於て盛大なる慶讃會を擧行し午後一時大阪寺院一同會合慶讃法要慶修奉戴文拜讀知事師團長市長信徒代表村雲結人會の祝詞各宗管長各團體の祝電朗讀引續き講演會を開會し細野少將は「時勢と立正大師諡號宣下」高島平三郎氏は「立正大師の尊號に就て」本多管長猊下は「大師號勅諭に就て」と各演題の下に講演を爲し引續き夜間講演には權藤中將は「所感」田中智學氏は「宗化の新展期」本多管長猊下は「立正大師の高風」等にて各講師の熱烈なる講演を爲し晝夜七千餘の聽衆に多大の法悅と感激を與へ閉會した。

二川町の奉祝法會

愛知縣渥美郡二川町なる二川統一團支部主催で十二月十七日午前九時から同町妙泉寺に於て勅諭謹發立正大師奉祝大法會を修行し本多管長猊下御親修を始として各近傍寺院住職參會し盛大なる大法會を修行し餘興數種、福引、投餅、模擬店等があつて頗る賑はつた亦夜に入つて七時から全町北部小學校講堂に於て思想問題講演會を開き細谷豐橋市長、加藤少將、本多管長の講演があつて聽講者堂に溢れ之亦頗る盛會を呈した尙之が爲同町は殆んどお祭騷ぎで二川製絲組合など祝意を表して當日休業し亦二川町自身の東京本郷春木町伊藤照雄氏は日蓮主義宣傳費に資すべく金一千圓を寄附し同町町民よりもこの盤を盛にするべく種々寄贈をなした。

謹賀新年

本春早々　日蓮聖人御眞蹟拜寫第二期事業を奉行致し度所存に候間御援助被下度候

就ては御眞蹟御保管の御山へは夫々改めて御願可申上候得共其際は拜寫の御便宜を與へられ度豫め懇願仕置候尚今回は如何なる斷片と雖漏れなく拜寫致し度企望に付御秘藏の御方は下名へ御一報願度茲に謹告候也

大正十二年元日

東京市淺草區新谷町幸龍寺住職
神保辨靜
電(淺草三〇六四)

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

法華經要文精義

大冊五本 定價金壹圓參拾錢

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢（品切れ）
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解語錄　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金拾八錢
○大藏經要義　一部金參圓八拾錢十一卷迄既刊　送料一部金十八錢半年前金送料不要
○法華經要文　並製金參拾錢　上製金五拾錢　送料一部金貳錢
○佛教信仰の正統　金壹圓參拾錢郵稅六錢

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし

東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一冊	金參拾錢	送料一錢
一ヶ年	金參圓參拾錢	送料共

廣告料

一頁	金拾錢	前金の事
半頁	金六圓	
四分ノ一頁	金參圓半	

大正十二年一月廿七日印刷納本
大正十二年二月一日發行（第三百三十七號）
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　鈴木日雄
印刷所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　三秀舍
發行所　統一發行所　振替東京五一〇七一番　名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常樂寺內
編輯所　統一編輯所　電東九一八番

不許複製

目次

法悅の內容……本多日生
大師號宣下と思想問題……野澤悌吾
大法鼓經講義……本多日生
日蓮主義より見たる無量義經……井村日成
人間苦と日蓮の信仰……國友日斌
五錢の佛樣……古田昂生
雪の神通川……忍鎧生
記事報道……
法華經要文講義……本多日生

第廿七年三月號